

平成二十六年四月一日発行 第二十四巻第四号 減価第一七四号（毎日一回一日発行）
平成二十五年九月十八日第三種郵便物認可

槐

かい

平成26年4月号

岡井省二創刊



こんな時だから

高橋将夫

白息の声には出さぬ祈りかな
冬の凧終はれば何か始まりぬ
焼芋や背戸から入る母の家
寒林は人が恋しくなるところ

寒鴉群れて楔形文字のごと

大地てふ卵の殻に紅葉散る

「俳句四季」十一月号より五句

氷ることなし滝壺も心底も

冬の日を月の鏡が反射せり

平成は髭を伸ばさずどてら着ず

日本が好きで北風やつてきし

こんな時だからみんなで牡丹鍋

槐安集

水野恒彦

寒卵いよよ緊まれる海の紺
大綿の舞ひて歳月流れだす
幻の考寒夕焼を見据えをり
梟や凡の月日は無音なり
冬の星文字は言葉の影ならむ

加藤みき

降る音の聞えてゐたる牡丹雪
わが窓を西へ西へと天狼星
父母も兄も白玉椿あたりかな
長き廊の彼方明し雪の果
あちこちの野山に点せ狐火を



中島陽華

窺ひの足は文楽冬至の日
あら玉の春のマジョリカタイルの湯
別当の頭の低うして初茜
筆築のあんばいよろし着膨れて
玉子酒作り相伴三番叟

竹内悦子

ゆつくりと湯につかりをり牡丹の芽
裏白を見てをる川端柳かな
あら玉の蓮田に立ちし煙かな
声明の幽かに聞こゆる桜の芽
どんど火に二こゑ三こゑ八咫鳥

雨村敏子

初葉師白鳳伽藍闇淡し
とりけものうち揃ひたる恵方道
宝恵駕籠に声かけてをる着ぶくれて
狸々の集まつてをる恵方かな
ゴリラのももこちやん一家お正月

近藤喜子

人日や人は人の世にて生くる
ひつそりと冬すみれ咲く君に
凍鶴の影あをあと痛きほど
風花や青空に舞ふ一行詩
待春や明るき木々に未生の声

本多俊子

初明り見えないものを見つめをり
霜の声少年明日をかがやかす
鷹の目や空ゆく風を聞いてをり
わがいのち寒菊に触れしづかなる
秘め箱に紐かけておく寒椿

瀬川公馨

あらたまの好色一代女はる
空つ下手の焼詣の番してあたり
ひとつとや片つ端から赤海鼠
つけ馬の入りそびれたる三日かな
初霜の人間じんかはやも汚れたる

久保東海司

床の間に坐す型よきかがみ餅
鳴り止まぬ鈴の緒二日日和かな
綾取りの額寄せ合ふ雪明り
登校の子ら白息をぶつけ合ふ
僧立ちて燭継ぎ替ふる初大師

中野京子

今年又よいしよと立ちて歩き出す
山道に人の湧きくる初詣
新しき年の流れに充電す
もとめたるハモニカ二本初御空
顔のほてりを刷ける寒の風

柳川晋

寒紅をさすや小顔になりにつける
寒の灸ツボは三百六十五
化生より化粧野生の狸かな
列島は鳴り響く弓厄払
日渡りや足の裏より芽吹きたる

岩下芳子

山焼きの火をつけにゆく消防団
まるまつてをらず出てこよ穴施行
仙人の昨日懐石脇みはるりし雪女
臘梅梅の薫る梅町三丁目
大淀の流れ貫く水鶏笛

近藤紀子

餅花の枝分けて入るピザの店
掌に紅まどんなといふ蜜柑あり
寒の水に切干浸す夕かな
鮫鱒魷魷の交じりゐて
窓の燈は生くるあかしや冬林檎



槐市集

柴田靖子

年迎へ庭の松の木色さゆる
初鴉今朝はやさしく見つめたり
寄せ返す波飽かず見し冬の海
静もりてそつとよりくる霜の声
御転婆も春着の匂ふ女となり

庄司久美子

湧き水の音のひろがる春の霜
二人子を乗せる銀輪寒夕焼
こんもりと線路の糞まの寒見舞
また匂ふ迦陵頻伽のゐる蒲団
水仙の香をもみこみし豆板醤

杉原ツタ子

果樹園の透けて灯しの冬館
雲の間にしばし憩うて寒の月
日の暮や姉を気遣ふ木菟の声
初仕事留守を預かる吾子とぬて
初夢や前に結びし袋帯

鈴木初音

平成のあらたまの日は白コート
樹氷林人の想ひは列なせり
軒砕く勢となりし氷柱かな
野の馬のアイヌの踊り年はじめ
大寒や父母の背中に背負ふもの



竹中一花

大樟に胸当ててをる三日かな
寒鶯や森の辺急に明るくて
一面の菜の花追うて遊びをり
風花の朝を眠りし子の寝顔
子の背ナに初東風まはる社かな

田中信行

文明の交差路イスタンブールにてにありナナカマド
海峡の八端クルスや風冴ゆる
前厄の年に向かひて八端クルスニロンア市街の十七菜初日の出
一病を得ての自由や春隣
寒ぶりのしやぶしやぶの身にほくそ笑む

谷岡尚美

にこにことバウムクーヘン切る二日
大盃に屠蘇を飲み干す二十かな
餅搗きや小豆ふつくら煮え上る
寒鰈炙り上手の母なりし
諭ふれば水仙の香の少女かな

寺田すず江

永らふも天の摂理や年迎ふ
先人の知恵に倣ひて去年今年
ワンテンポ遅れてをりぬ初笑ひ
いつの世も生生流転寒昂
もの思ふ年頃なりし冬林檎

時澤藍

万物の息ひそめある寒の月
贅沢にたばね切りして水仙花
現世に揉まれもまれて波の華
着ぶくれて天狗咄しの高笑ひ
ちやんちやんこ粹に着こなすマルチーズ

中貞子

成人式迎へし朝の実南天
日々磨く床の光や万年青の実
犬連れの歩巾に余る初氷
臘梅や鉢かつぎ姫あたりける
百歳にてギネスブックや春の夢

槐集

高橋将夫選

如意宝珠温藉をんしやと旅の春
枚方 熊川 暁子

ある高さより雪片のかたち見ゆ
散らかつてそれで落着く炬燵の間

煮凝りや箸にかからぬひとり言
豪雪はお国訛りを封じ込め

我が影と手をつなぎたき冬の道
大阪 有松 洋子

雪女幼なじみは妖狐なり
白鳥の父を呼ぶこゑ母呼ぶこゑ

冬眠の蛇はピンクの夢を見る
春まぢかけふは光の満ちてをり
数へ日のこの一日をいとほしむ
江島 照美

冬ざるる水も震へてをりにけり
振り向いて深きに誘ふ雪女

生くるものすべて枯れゆく美しさ
冬菊の絡まり合うて立つてをり

飛び込みて来し絶景や初暦
岡崎 岩月優美子

朝日射し神々しくも霜柱
少年よ宇宙目指せとどんどの火

寒暁やダリの時計にうなさるる
燃え尽きし楷火や愛の一過程

初暦まだ見ぬ月日ま白かな
喜屋川 山根 征子

大笑ひ福きたりける初天神
雪の宿蟹買う朝の赤財布

さんが日十七文字とあかさたな
大寒やひとり入りけるお好み屋
言の葉の胸にぽつぽつ寒紅梅
摂津 中田 禎子

普陀落へ誘ひてをる鯨かな
冬の虹ガラスの箱にしまひけり

一杯のコーヒー雪の山眩し
フアックスの紙の散華や初仕事

銀河往来 高橋将夫

◇『槐集』鑑賞

ある高さより雪片のかたち見ゆ 熊川 曉子

絵ならば降る雨や雪はたいてい直線的に描かれる。ところで、雪が降っている大空を見上げると、点の集合に見える。牡丹雪などはある高さから結晶の姿が見える。掲句はそんな雪が降る大空を見上げた情景がリアルに描かれている。

〈如意宝珠〉〈炬燵の間〉〈煮癡り〉〈豪雪〉の四句にも、それぞれ作者ならではの視点と表現がみられる。

我が影と手をつなぎたき冬の道 有松 洋子

一人ゆく冬の道は淋しいものだ。それを「我が影と手をつなぎたき」と捉えたあたりが作者ならではの感性。

〈白鳥の父を呼ぶこ糸母呼ぶこ糸〉は心に響く。

冬ざるる水も震へてをりにけり 江島 照美

荒涼とした冬景色。川か池のさざ波は寒さに震えているようだし、ゆれるコップの水まで震えていると言われても納得できよう。繊細な感性。

寒暁やダリの時計にうなさるる 岩月優美子

寒暁でそろそろ起きなければならぬ時間だが、寒くて起きるのがおっくうだ。そんなこんなでダリの歪んだ時計の絵が夢に出てきてうなされたという。時空の歪みかもしれない。

初暦まだ見ぬ月日ま白かな 山根 征子

初暦はまだ何の書き込みもなく、文字通り真っ新である。これからの月日もまた同じ。それを「ま白かな」と捉えたところが、作者ならではの視点といえよう。

冬の虹ガラスの箱にしまひけり 中田 禎子

冬の虹は冷たくてクリアな感じがする。はかなく消えてしまふそんな冬の虹を大切にガラスの箱にしまっておいたらどんなにいいだろう。そんな作者の感性がうらやましいと思う。

しぶき上げ大いなる年始まりぬ 寺田すず江

昨年はいろんな意味で多難な年であった。それを引きずっての今年の幕開けだが、まさに「しぶきを上げて大いなる年が始まった」と痛感する。

掃き初めの箒の先の浅みどり 犬塚李里子

シャープで理知的な作風の作者だと思っているが、「箒の先の浅みどり」というような繊細な感性も持ち合わせているのだと改めて感心させられた。

鬼の面作りし子の手温かし 竹中 一花

何気ない日常の景であるが、子を見る作者のあたたかいまなざしが感じられる一句。(以下略)